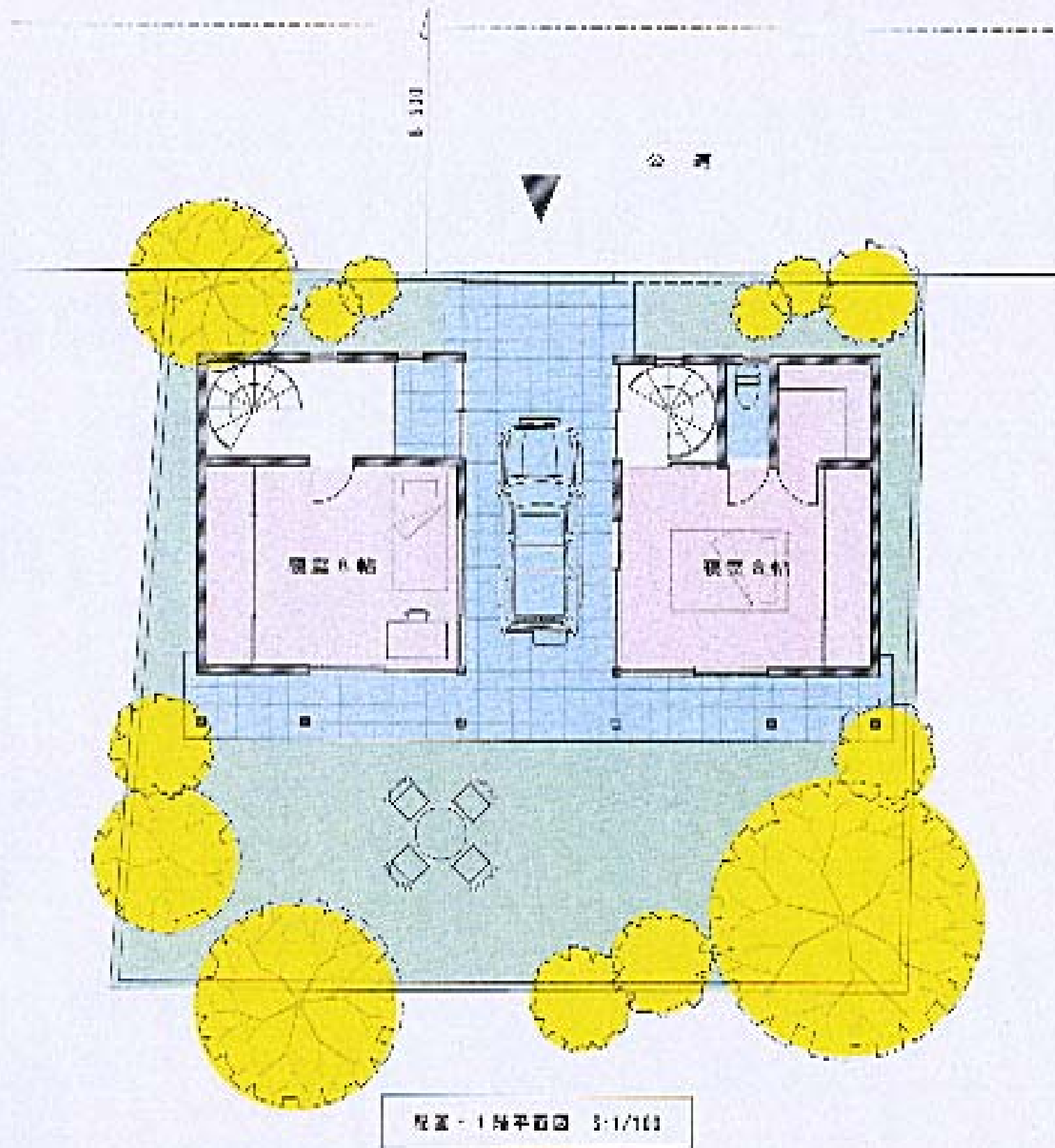


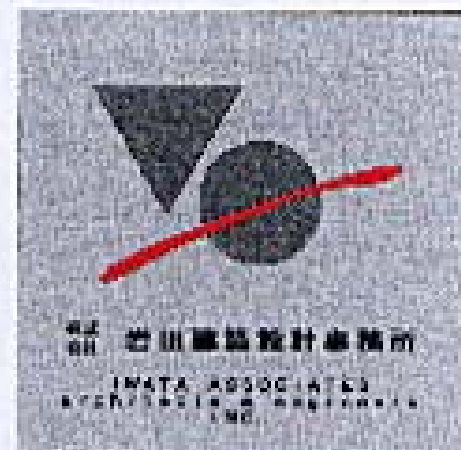
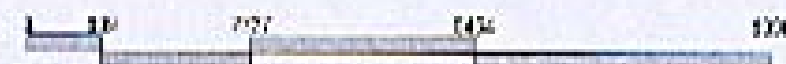
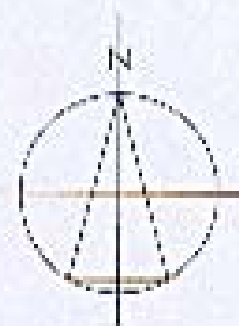
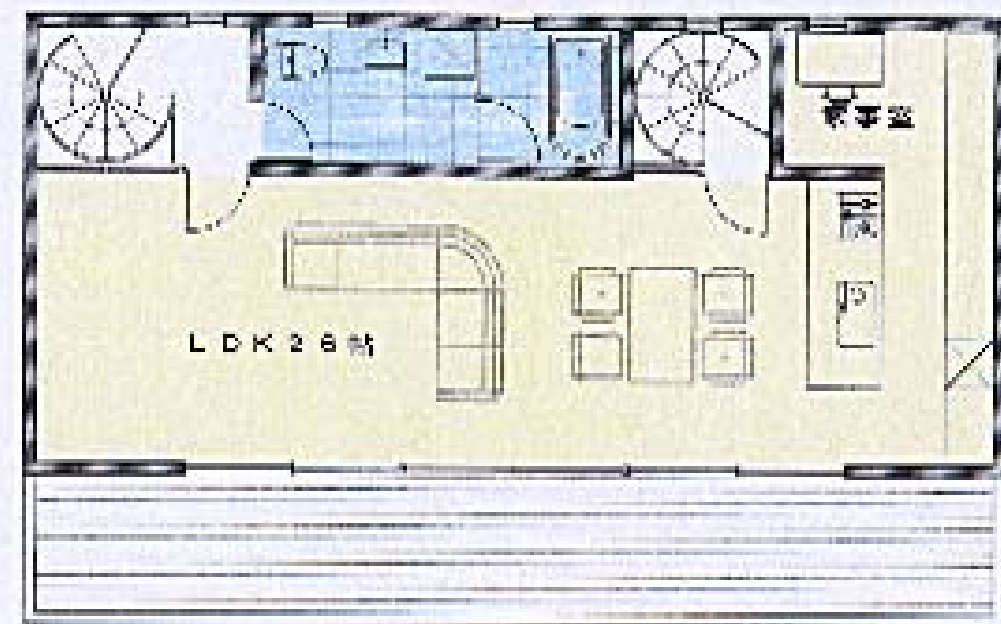
(社) 神奈川県建築士事務所協会設立 30 周年記念事業

国産材を使用した木造住宅「住・縁・家」事例作成住宅ゼデザインコンペティション



面積表

敷地面積	170.45 m ²
建築面積	75.19 m ²
1階床面積	49.17 m ²
2階床面積	64.44 m ²
延床面積	114.61 m ²



1. 設計条件

想定した家族構成は、以下のとおり。

夫 50代前半、建築設計事務所、つまり私自身。

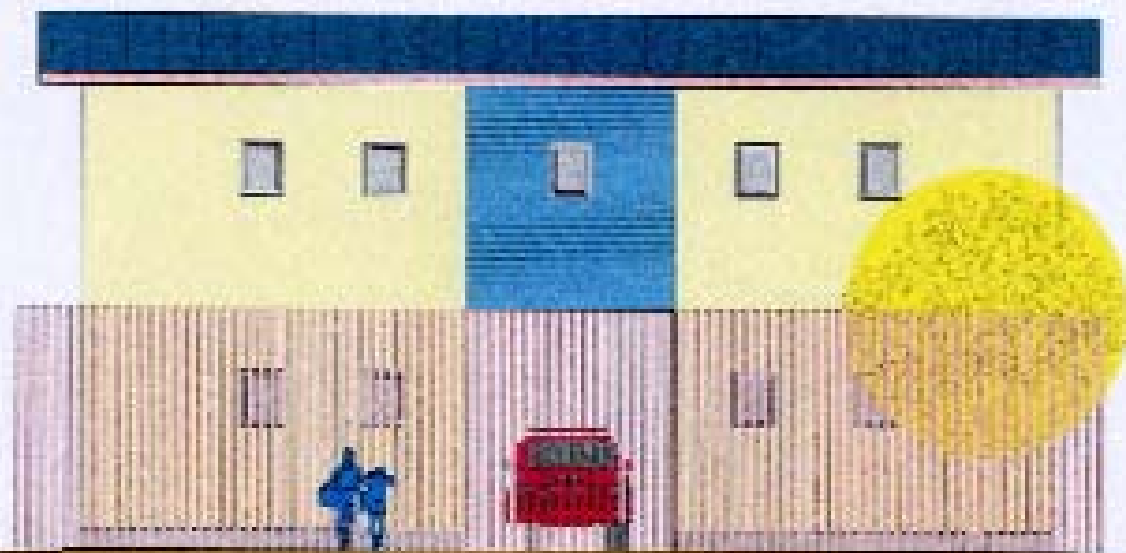
妻 40代後半、週4日のパート勤務。

長男 既に社会人、独立している。

次男 今年20才、学生ただしバイトがメインのようだ。

2. コンセプト

この住居は、子供が数年のうちに独立することが予見され、それ以前は、夫婦二人の生活が営まれることが想定できる。現在いっしょに暮らしている次男は、学生ではあるがアルバイトなどで両親と一緒に暮らした生活をしているため独立世帯に近いゾーニングとしたが、子供が独立するころには夫のための占有の場所として、自身の人生のために使えるようになるだろう。



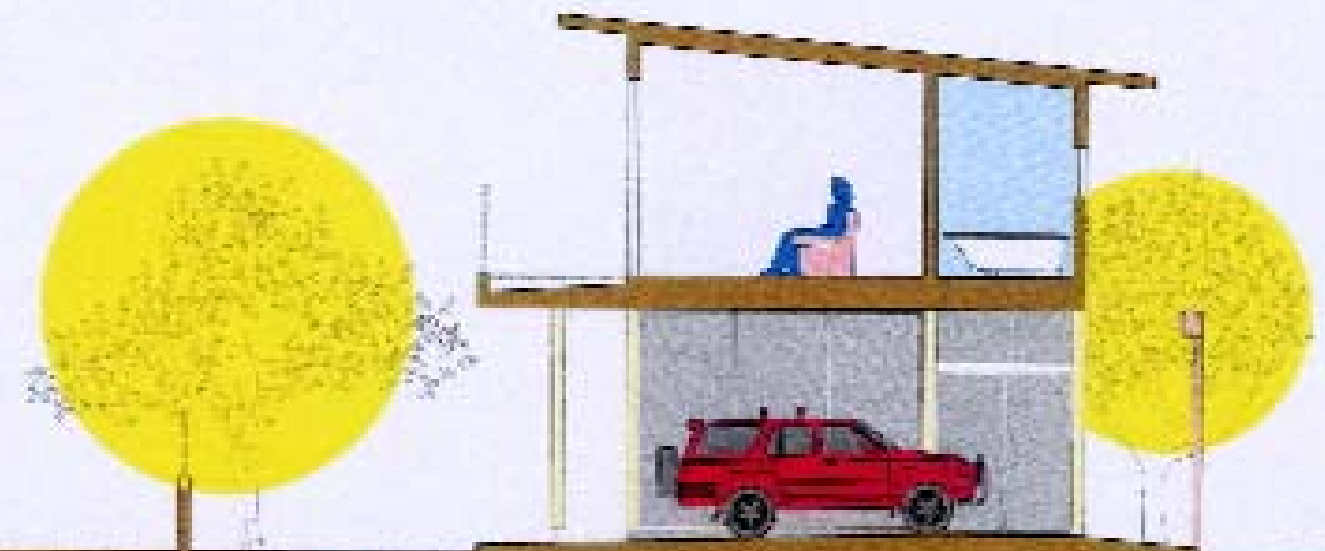
北側立面図 5.17/00

3. 県産材を効果的に使用する

構造体としてはもちろんだが、人と間に触れる部分に木材を使用することが効果的と考える。床板、室内建具、バルコニー、外構があげられる。外構についてだが、木材は火災に対する処理が必要で、大断面の構造材や耐火材を注入した外装等が考えられるが、県産材を使用するのであれば、品質試験によって耐火性能が証明された強化ガラスを塗布する方法が考えられる。

4. 県産材を使用するメリット

県産材を使用する最大のメリットは、現場に対する負担の軽減があげられる。生産地からエンドユーザーまでの距離が短いということは、コストパフォーマンスに優れていることのみならず、運搬にかかるエネルギーの消費が少なく、CO2の排出が少ないことを意味している。また、生産物と評定られる住宅が、同じ気候風土にあることは、生命ある木材が生き続けるうえで悪影響がなかったことといえるだろう。さらに、トレーサビリティの概念が重要視されはじめた現在、生産者の顔が見えることは、エンドユーザーのこころを癒やすことと言えることである。



断面図 5.17/00

